

# 倉橋惣三と誘導保育論

——倉橋惣三の幼児教育論の紹介——



津 守 真

今年、倉橋惣三の没後十年にあたる。倉橋惣三といっても、今では、幼児教育を専門とする人でも知る人が少なくなつたことは、私には、たいへん不思議なことに感ぜられる。それは、倉橋惣三の

幼児教育論は、現在の幼児教育の基礎をつくつたものであり、現在においても、なお新しく、傾聴すべきものをもっているからである。最近、絶版になつていて入手することができなくなつていた旧著が、この機会に選集として再刊されることになつたが、これは、わが国の幼児教育の進展にとつて、意義深いものであると思ふ。

大正や昭和のはじめに書かれたものが、四十年後にもなお読む価値があるということは、変動のはげしい現代において、これもまた不思議といわねばならないのかもしれない。

しかし、四十年前に問題とされたことが、四十年後の今日でも、いまだにすっかり解決されず、同じ問題がくりかえし提出されてい

るのが、幼児教育界の現状である。また、四十年前に、彼が提出した幼児教育論は、当時にあつても新しかったものであるが、いまだに結実されずに現代にもちこざれているともいえよう。

ちょうど十年前、雑誌「幼児の教育」の昭和三十年の一月号の巻頭論文に、倉橋先生にぜひ書いて頂きたいとお願ひしたことがあつた。そのときに、先生は「新しい年を迎えるにあたって」と題して、旧著の中から一文をこのまま倉橋用紙に写して書いてくださった。その文章は、次のような書き出しではじまっている。

根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉のところまで動いている。かなりいろいろのことが考えられ、試みられ、部分的に究明されるにもかかわらず、意極の決定はいつまでも残されている。——わが国の幼稚園教育界は、こんなふうにして

一年一年過ぎていっているのではあるまいか。時の経過はなにほどこかずつの進歩を積み上げていくには相違ない。しかしこの進歩は、あまりに気まぐれる。無秩序な、断片的な集積にすぎないものであって、そこに何等の系統的組織的進歩というものを見ない。思えばあまりに非学問的なことである。

旧著の引用のあと、次のように結ばれている。

私の幼児教育に関する考えは三十年前も現在も根本的には変わっていない。基本的真理は時代の変化にかかわらず真理である。

倉橋惣三がおろした地盤の上に、着実に積み重ねられたのが現在であったなら、どんなにかよいであろう。

倉橋惣三の幼児教育論の中心は、誘導保育論であり、これは、現代の教育史における第二の教育改革ともいえる今世紀初頭の新教育論に根ざすものである。それにかえて、彼の幼児に対する態度には、独自の直観的洞察がある。

いま、この機会に彼の誘導保育論を中心にして、倉橋惣三の幼児教育論を紹介しその現代的意義について記してみようと思う。

## 一、誘導保育論の成立

倉橋惣三が現代にのこした大きな功績は、当時のフレーベル主義の伝統をひいた形式的秩序を重んずる保育形態から幼稚園を解放して、幼児の発達にふさわしい生活を、幼稚園の中で実現しようとしたことであろう。彼が東京女高師の附属幼稚園の主事となった年、大正六年に、フレーベルの思物の積木を、四角い箱の中から出して、ただの遊具として籠の中にいれ、同時にそれまで行なわれていたいわゆる会集「朝の集り」を廃止した。これは、日本の幼稚園の歴史にとって、ひじょうに大きなできごととして記憶されてよいことである。この間の事情を、彼は、その自伝的な著作「子供讃歌」の中で、当時の『新保育』と題して、次のように述べている。

「若い彼は当時の保育界の現状にあきたらなかつた。それは彼の研究の結果か、若きのせいかわからないが、とにかく、不満の点が理論にも実際にも多かつた。ただし彼自身の考え方として、教育にそうそう新が得られるわけではない。千古永却の真こそとうといのであることは知っていた。それで、世間の新しがり屋のように、何もことごとく新保育の名で、高慢な顔をしようなどとは思ひもよらないことであつた。ただ一途に真保育を求めたのである。彼がフレーベルアン・オルソドックス派に盾ついたのも、論理主義や伝統主義のために幼児教育の真が覆われるのを怖れたからに他ならなかつた。そういう心持ちのなかで、彼は東京女高師附属幼稚園の主事を命ぜられた（大正六年）……新まいの園丁に大した花壇の設計な

んかできようもないが、一応気をかえるためにしたことは、創園以来の古いフレイベル二十思物箱を棚から取り降して、第一、第二その他系列をまぜこぜにして竹かごの中へ入れたことであつた。(子供讃歌、倉橋選集、一九八一—一九九頁)

倉橋惣三が、このような新しい保育にふみきつたのは、彼も述べているように、けつして、彼の独創ではない。欧米においても、ベスタロッチ、フレイベルなどによって、ひとたびなされた教育改革が、年月とともにまた形式主義におちいり、その批判として、いわゆる進歩主義教育、新教育が主張されてきたのが、一九〇〇年代の初頭、すなわち、明治の末から大正のはじめであつた。児童心理学の草わけと言われるスタンレー・ホール、新教育理論の巨頭、ジョン・デューイーらが理論的基礎をきづき、パティ・ヒルは、シカゴ大学の附属幼稚園でそれを実際に移していた。

わが国においても、早くより、欧米の新教育思想は紹介され、「幼児の教育」の前身である「婦人と子ども」の創刊号、明治三十四年(一九〇〇年)より、その編集者、東基告によって、フレイベル主義の批判ならびに、新教育について記されている。また、明治三十七年発行の、東基告「幼稚園保育法」、明治三十九年発行の、中村五六「保育法」の中にも、フレイベルの批判が散見される。フレイベル批判ならびに新教育の提唱は、けつして倉橋にはじまつたも

のでなく、その気運はわが国においても、次第に醸成されていたのである。ちょうど、そのような時に、倉橋は女高師附属幼稚園の主事として、名実ともに、新教育の実践という役割を荷つたものである。

倉橋惣三自身の新教育思想も、かなり早くより、見ることができ「婦人と子ども」誌上には、明治四十三年ころより、ほとんど毎号にわたつて何らかの記事をみる事ができる。明治四十三年九月「幼児の遊戯について」、同十一月、「感化誘導」などは、発達心理学にもとづいた教育論である。欧米の新教育思想の紹介も多数見られる。たとえば、明治四十四年一月には、「机辺だより」として、「クラーク大学の児童研究事業」が紹介され、「バルマー氏の保育法の基礎としての発達段階」が紹介されている。クラーク大学は、スタンレー・ホールの児童研究の根城であり、バルマー氏は、新教育の指導者である。また、同年八月〜十月には、スタンレー・ホールによる、有名なフレイベル主義幼稚園批判の書、「幼稚園の改良」という論文が紹介されている。このようにして、欧米の新教育思想を学びながら、倉橋は、また独自の眼をもつて、日本の保育界をみ、そこで必要とするものをさし示していった。

明治四十三年に、彼は、京阪神三市連合保育会の総会で「保育の新しい目標」と題して講演を行なつた。これは、著書「幼稚園雑草」(倉橋選集、第二巻に収録)の中に収められているが、その論文の

終りに、著者は次のような注釈を後に加えている。

『これは四十年近い以前に神戸において試みた講演である。幼稚園教育に関する私の最初の講演であるが、今も尚この考えを捨てない。のみならず、今日も、まだ、同じ注意を必要とするところの多くあるのは、わが国幼児教育のために遺憾である。著者』

これほどに彼が強調している幼児教育の新目標は何か、それは、神経の健全、強健な子どもをつくることであるといっている。すなわち、「困難に打ち克って疲れず、所信と使命とを実行して行き得る」人間を現代は要求しているという。そのために幼稚園は何をすればよいかといえば、第一には、自然に子どもをふれさせ、戸外保育を無視せねばならない。第二には、子どもを机から解放し、小さな手仕事から、大筋肉を使う方向へとかえてゆかなければならないと言ふ。幼稚園生活のスケールを大きくして、神経質に生活をこまぎれにすることをやめたらよいという主張である。

この時の講演のようですが、「子供讃歌」の中にこまかく描写されている。

『神戸—望月くに女史』

武庫山を背にした斜面の港町の八月は、明るい日光と海からの涼風にめぐまれて、さわやかである。神戸幼稚園の広い部屋の硝子窓が、いっぱいにはなたれて、中央の大テーブルには、籠に盛られた新鮮ないろいろの果物とサイターの泡のたつ幾つかのコップが

置かれてあり、白いテーブルクロスを、窓からの風が、ひらひらとさせている。」という書き出しからはじまって、次のように記してある。

「翌年の春、彼は、三市連合会の総会で、『保育の新しい目標』と題して、長い講演をした。東京では、遠慮してひかえていた彼の新保育論、ことに、フレイベリアン・オルソドキシシーに対する批判的な論を、望月さんの求められた通り、勝手に自由に、やや無遠慮なくらいに説いたのである。」(倉橋選集一八一頁—一八二頁)

こうして、彼が、大正六年、東京女高師の主事となるとともに、彼の保育論は、実際保育に実現されていった。そして、たんに、欧米の新教育論の直輸入ではなしに、彼自身の保育論は、その実践的協力者の助力を得て、大正末年から、昭和初年にかけて次第に熟し、昭和九年の「幼稚園保育法真諦」となって結実するのである。(倉橋選集・第一巻に所載)

## 二、誘導保育論の構造

「幼稚園真諦」の中心をなす教育論は、誘導保育論であり、現代の幼児教育の基礎をなす教育論であるともいえる。次に、「幼稚園真諦」にもとづいて、倉橋惣三の誘導保育論について、その輪郭を述べる。

彼の教育論は、実践を予想することなしにはあり得ない。しかも、

その実践は、しっかり

した教育の原理に立つ  
ものでなければならな  
い。その原理と実践を

結ぶところに、実際の  
教育論がある。原理が

実現されるのは、一日の生活の中においてであり、その一日がつま  
重なつて数週間を形成するところに保育案ができる。

### 1、誘導保育の原理

児童観

保育の原理は、まず、それを支える児  
童観から出発する。誘導保育の基礎に  
は、まず、人間を尊重し、幼児を一人の  
人間として尊重する態度がなければなら  
ない。この児童観は、「幼稚園保育法真  
諦」の初版の第一篇保育法真諦の扉の、  
倉橋惣三の美しい文章に、よく示されて  
いる。

「教育はよりよく生かすことである。  
よりよく生かすには、自から生きている  
ものをまず存分に生かしておくことに始

原	理
案	日
一	踐
実	

まらなければならない。これが人間の常識である。」と幼児に向う  
根本的態度が示される。

保育者は、まず、相手を生かす努力にはじまり、しかも、自ら  
は、他人を生かすために表立たないようにならなければならない。「自ら  
をあらわにしないで、そつと他を生かす。これ人間最大の愉快であ  
る。」という。幼児教育にたずさわる者の根本的態度として学ぶべ  
きである。

### 倉 橋 惣 三

教育はよりよく生かすことである。よりよく生かすには、自から生きているものをまず  
存分に生かしておくことに始まらなければならない。これが人間の常識である。

相手の生活を認めゆるして、それを尊重することは、生きているものに対する義務であ  
り、礼儀である。況んや相手は幼きものである。敢て犯さざらんことに細心の用意がな  
くしてはならない。これが人間の作法である。

生きているものが、われあるによつて一層生きてくれる。しかも、われは常に相手の生  
活の下に潜み内にかくれて、その意図と努力とを表立てない。自らをあらわにしないで、  
そつと他を生かす。これ人間最大の愉快である。

幼稚園保育法真諦、初版第一篇の扉より

## 目標論

幼児の中に実現したい教育目標はいろいろあるが、それは、幼児の中に実現できるものでなければ意味がない。そこで、むしろ、教育目的に子どもをひっぱっていくよりも、対象に即して、目標を実現することの方が重要であり、対象本位に考える必要がある。

## 方法論

それでは、相手を尊重しながら、対象に即して教育目標を実現していくにはどうしたらよいか、そこに保育方法論が生れる。これが誘導保育論である。

「幼稚園真諦」の第一篇の終りに、次のような図式で、方法論の梗概が示されている。(倉橋選集第一巻、五七頁)



まず、幼児のありのままの生活を生かすことからはじまる。教育は、幼児の生活に近づいていかなければならない。そして、その幼児の生活が十分に満足するものとなるように、充実したものにしていく。現代のことばを用いるならば、幼児の自発性を生かし、ニードをみたしていくことを考える。それには、自己の活動ができるた

めの自由(時間)が必要である。

この上に指導が考えられるのであるが、それは、上から子どもをひっぱっていく指導ではなくて、充実指導である。すなわち、充実したいのは自己充実できないところを指導してやることである。それはどのようにしてなされるかといえば、保育者が子どもの中にはいつていつてはじめてできることである。

## 誘導

充実指導は、その場に応じた指導であるが、さらに、子どもの断片的な活動に中心を与えて系統づけてやるところに、誘導が生れる。すなわち、子どもの興味に即して主題を与えてやることによつて、現代のことばを用いるならば、いっそうよく動機づけられる。

いわゆる單元あそびともいえるような、「お店や」「汽車ごっこ」「動物園」などのほじまりが、ここにみられる。

最後に「教導」がくるが、これは最後にあって、ほんのわずかに付け加えられるにすぎない。ちょっと知識を与えるなどである。

## 2、保育案

保育案の考え方については、これも、「幼稚園保育法真諦」の初版の第二篇の扉に記されている文章によくあらわれている。用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。」と保育案、教育計画に対する根本的態度が示される。

### 倉橋惣三

用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。

用意は細心でなければならぬ。しかし、細心は当方の心がけであって、それを客にふすべきものではない。その心入れがどこにあるのか気づかれないまでに細心でなければなるまい。

どこに用意があるのかも心づかせず、全く自分達の心からのように、その用意を受けさせてこそ、客をもてなすというものである。もてなしの上手とはいうべきものである。

その上手な趣向に誘われて、客は時の移るのも、もてなされていることも忘れてくれる。客の幸福これに如くはない。主人の喜びもまたこれに過ぐるはない。

これ、すべて、人が人に対する常道である。教育もまた同じ。

幼稚園保育法真諦、初版第二篇の扉より

子どもの自発的にみえる活動のうらには、保育者の側に客をもてなす用意がある。

誘導保育案においては、幼児の自然な生活が尊重され、それが発展、展開される。保育者の側には多くの準備が必要だが、実際に展開される場においては、保育者の準備は後にかくれ、子どもの意図が正面に出てくる。その場をいかに展開させるかに当っては、保育者の創造性が必須条件となる。

また、ここで注目すべきことは、保育案と保育内容、(ねらい、または、保育項目)との関係である。

「まず保育項目があって、保育案を作るのではなく、まず誘導保育案をたてて、それから各々の保育内容事項が考えられるのです。」(倉橋選集、七七頁)と「幼稚園真諦」の中に明記されているように、こまかいねらいをくみ立てて指導計画ができうるのではなくて、逆に、生活の主題があって、この中で多くの価値あるねらいが実現されるようにすることの重要性が述べられているのである。この点は、今日でも、あやまりを犯すこと

がいかに多いことであろうか。

### 3、一日の流れ

実際保育に当っては、一日一日がたいせつである。どんなにりっぱな計画があり、原理があっても、この日一日が子どもにとって満足のゆかないものであったら、それはよい保育とはいえない。

一日の流れについても、著者は、初篇の第三篇の扉に次のように

述べてある。

「つぎめ無きを貴ぶのは練絹だけではない。われめ無きを賞づるのは、青玉に限らない。」と著者はいう。

朝、幼稚園にきてから、帰るまで、幼稚園の生活は、流れるように、自然に進んでゆくのでなければならぬ。自由遊びから仕事へ、仕事から自由遊びへと、その境界はなくてよいはずである。幼児にとつては、遊びと仕事の区別はない。また、個一分団一組と、

### 倉橋惣三

つぎめ無きを貴ぶのは、練絹だけではない。われめ無きを賞づるのは、青玉に限らない。何ものにも渾然として完きを美とするからである。断片と破片と、いくらこのひとときれひとときが美しそうでも、ついに完きを味い難い。まして、何を苦しんで、求めて、完きものを裁ち、裂き、こぼつことをしよう。

生命を貴び、自然を愛するものは、故意と作為とを嫌い、一切のわざとらしさを忌む。そこには、他の何ものを得ても、真を失うからである。まして、何のために、強いて、生命を傷つけ、自然を害うことを企てよう。

美と真を軽んじて、なんの正しい教育工夫があろう。

幼稚園保育法真諦、初版第三篇の扉より

子どもの活動は、あるときは個人で、あるときは小さなグループで、あるときは組全体で、その時に応じて人数も変化する。

幼稚園の朝は、とくに重要であり、折にふれて強調されるが、幼稚園雑草の中には、とくに、「幼稚園の朝」として、次のように述べられている。

「幼稚園の朝は大切な時間である。子どもの新鮮な心持ちを如何に迎えるかは、大きな注意を要する問題である。昔の幼稚園では会集ということをした。会集そのものの問題は別の話として、とにかく、それを教育開始としたものである。会集前は幼稚園のまだ始まってない時間とした。会集はしないでさあこれからとくぎりをつけて教育開始をする風がどこにもある。そのくぎりを鐘するのもある。「みなさんおはいり」でするものもある。いずれにしても、このくぎりがある以上、その前は軽く扱われる。子どもは来ても、先生はいても、まだ幼稚園は始まっていないことに考えられたりする。それでいいものであろうか。」(幼稚園雑草・倉橋選集第二巻)



教育というものが、きわめてダイナミックにとらえられている。これを実践するだけでも、幼稚園・保育園の教育はまるで違ったものになるであろう。

#### 4、実践

よいと思つた教育の原理でも、これを実践にうつすのには、実行力が必要であり、よいと思う方向に一步をふみ出す勇氣が必要である。

「幼稚園保育法真諦」の第四篇には、誘導保育の実践例があげられているが、その前に、次のようなことが記してある。

「教育は、考えてばかりいては解らぬところがある……試みるには少しばかり勇氣がある。少くも無精者であつてはならぬ。工夫がある。独創がある。しかし、それが故にこそ、真の楽しさもまた伴うというものである。」

その勇氣をもつてなされた最初の誘導保育の実例が、「婦人と子ども」大正七

年に、「動物園あそびの記」として掲載されており、第二の記事が、

大正十四月の「八百屋遊び」として、「幼児の教育」にみられる。

(本誌に、再掲載してあるので参照されたい。) 現在、どこの幼稚園にも見られる、「動物園」や「お店や」の最初の試みとして、見るべきものがある。

#### 三、外国の幼児教育の動向との関係

すでに前に述べたように、倉橋惣三の誘導保育論は、倉橋惣三の

#### 倉橋惣三

教育は、考えてばかりいては解けぬところがある。いわんや、論じ合つてばかりいては、ますますことむずかしくなるのみである。試みて見るにかぎる。そこには、あんがいに多くの可能を見出される。おのずからなる会得にも到るというものである。

試みるには少しばかり勇氣がある。少くも無精者であつてはならぬ。工夫がある。独創がある。しかし、それが故にこそ、真の楽しさもまた伴うというものである。

一定の型と、くりかえされる手順と、それによつてラクラクと保育すること、保育されること、これほど幼稚園に真の楽しさを失わせるものはない。子どもに、然り、いっそう、先生に。

幼稚園保育法真諦、第四篇の扉より

独創によるものではない。すでに、米園において発した新教育、進歩主義教育の主張と同じである。その実際のモデルも、米園の新しい幼稚園に見ることのできたものである。一九一九年（大正八年）には、万国幼稚園連盟が、標準カリキュラムを作成し、新教育理論の實踐に役立てようとしているが、その内容は、ほとんど誘導保育論の論旨と同じである。ここでは、主題が選択され、幼児の興味と活動が重視されている。このカリキュラムが、現代の新しい幼児教育のカリキュラムの最初のものであり、また、基礎をなしているものと考えてよい。

(International Kindergarten Union, The Kindergarten Curriculum.

U. S. Bureau of Education Bulletin. 1919. No 16. 1—74)

倉橋惣三自身、このカリキュラムの翻訳を試み、大正十二年～十三年の「幼児の教育」に、「万国幼稚園協会幼稚園要目」として連載している。

その後、新教育論にもとずいた。實際保育のための手引書や実践例は、一九二〇年代、一九三〇年代に、欧米において続出しており、その実際の保育の展開例は、その理論的構成など、倉橋惣三の誘導保育論とほとんどかわらないのである。

このように、倉橋惣三の誘導保育論は、世界の教育史の趨勢の中で、けっして、特別に変わったものでもなく、むしろ、当然あらわれるべくしてあらわれたものといえることができる。それは、新教育

理論の實踐的展開にほかならないのである。

しかしながら、直輸入を嫌った倉橋惣三は、これを輸入品として紹介することにとどまらなかった。むしろ、ベストロッツ、フレールの教育改革の精神、また、進歩主義教育の教育改革の精神を、すっかり消化した上で、日本の幼児教育界に適合した形で、彼のいう「真」教育を實現しようとしたのである。ここに、倉橋惣三の新教育論の日本の性格があらわれてくる。それは、教育者精神ともいうべきもので、教育的な洞察を数多くふくんでいる。実は、倉橋惣三の論は、この教育的洞察の故に、多くの人が魅せられるのである。ここに、倉橋惣三の独自性がある。

#### 四、日本的性格

——教育者、保育者の子どもに接する態度について——

きわめて早い時期から、倉橋惣三の文章には、保育者、教師としての態度について、教えられるものが多い。

「幼稚園雑草」、「育ての心」の二著は、彼の教育観を示す文章が多い。幼稚園雑草には、大正十五年以前のものが収められ、育ての心には、昭和十一年以前のものが収められている。その後のものも、雑誌に発表されたものは数多いが、書物としてはまとめられていない。

すでに数多くの文章を引いたのであるが、倉橋惣三の保育論の日

本的性格にふれるのには、どうしても、彼の文章そのままを見なければならぬので、もう少し、例を引くことを許して頂きたいと思う。

「幼稚園雑草」の中でも、もっとも初期に書かれたものに、明治四十四年十一月の「婦人と子ども」に掲載された。「きげんのよしあし」というのがある。教育者自身が子どもの前に立つ時の心構えを述べたものであるが、こんなに早い時期に書かれたものであることに驚くのである。

#### きげんのよしあし

毎日のことである。きげんのよしあしは免れない。あるいは体の具合にも変りがある。天気加減もある。昨日一昨日の疲労のぬけぬけこともある。家のこと、友のこと、身のことにつけて、何かと屈伸も折々はある。始終にこにこと上きげんでいることは我々凡人にはなかなかむずかしい。きげんの悪い時はことごとものうく、おっくうになる。常にはさほどにも思わぬことが、うるさくもなればいろいろ気にも障る。まして心に心配ごとでもあるという時には、人の心配も知らないでと、ついぢれたい気にもなる。誰れであったか読み人は忘れたが、こういう歌をどこかで見たことがある。

我が胸のけふ憂ひも知らずして 袖にまつはる子供達かな

お母様にさえ時にはこういう感じがあるという。姉さんにもあるという。二十人三十人と多勢の幼児をあずかる若い身には、あとで済まないと思いがらも、つい起り易い感じである。保母諸君とて幼稚園のみに生きている人ではない。親もあり弟妹もあり恋もあろう身の、小さい胸につつまきれぬ物案じは誰れにもあることである。……中略

しかし、これはまだ修養の途中である。もう一段の修食を積んだ人には、このいろいろの切なさが無くなるのであるらしい。その場その場に心の闘をして努めて己れに克つ要もなく、それが心の自然になるものらしい。心の内にはどのような苦勞があつても、足ひとたび幼稚園の門に入り、耳に幼児の声を聞けば、そのまま活き活きと心をおこすものらしい。そしていかなる時といえども、不断の愉色を顔に湛えていられるものであるらしい。この聖に近い常性を得たのは、切々と心を練る我らの修養の目あてである。今日ただその途中、せめて我ままからの不きげんとつつしみたい。せつかく可愛い子どもの傍にいて、心で子供を拒けるようのことを誓みたい。

(幼稚園雑草、倉橋選集、第二巻)

子どもの前に出たら、教師は自分の感情を抑えて、子どもを受容するようにということを述べたものであるが、それだけいわれて

も、それは本当のことではあるが、私どもは、そうすることができない。ここにいわれているように、まず、教師の心の中にあるさまざまな感情や悩みがまず受容されて、はじめて客観的にみることができるようになる。現代のカウンセリングの理論がこのままここに表現されているのを見る。

ひとたび幼児の前に立ったときには、教師、保育者は、幼児の中にある可能性を見ることができなければならない。それによって教育的機能がはじまる。次に掲げるのは、大正七年二月に「婦人と子ども」に掲載されたもので、「園丁雑感2」として、主事になった倉橋惣三の感想集の第2である。

#### 人間の偉大さを

人間の偉大さを知るもののみが、人間を教育することの偉大さを知り得る。

人間に関する浅薄卑俗たる解釈、人間に関する無知と無感激。これほど教育上有害なるものはない。凡庸主義は、いつでも麻痺剤である。教育においてはことにそうである。世にこれほど有害なるものはない。……中略……

この子が目蓮になるかも知れない。この子がベーターベンになるかも知れない。私は驚き後ずさりしてその子供を見る。……

私は心理学によって子供を知り、教育学によって子供の教育法を学ぶ他に、たえず人間の偉大さを知らなければならない。たえず心にその感激を湛えていなければならない。そうでない時、私の目は子供において凡庸だけを見るものとなるであろう。

(幼稚園雑草、倉橋選集、第二巻)

幼児の中に、どのように伸びてゆくか予測できない可能性を認めるとき、私どもは新鮮な眼で子どもをみるようになる。

さらに教師、保育者は、子どもを見る眼を養うことがたいせつである。そして、子どもの心の動きや、ニードに対して敏感になることが、よい教師、よい保育者となる条件である。それには、あたりまえとみえる子どもの一挙一動に驚きの眼をむけ新しい意味を見出せるようになるとき、なし得られるであろう。次に掲げるものは、「育ての心」に載っているものであるが、昭和6年4月の「幼児の教育」に掲載されたものである。

驚く心

おや、こんなところに芽がふいている。

畝には、小さい豆の嫩葉が、えらい勢で土の塊を持ち上げている。藪には、固い地面をひび割らせて、ぐんぐんと筍が突き出して来る。

伸びてゆく蔓の、なんとという迅さだ。

竹になる勢の、なんとという、すさまじさだ。

おや、この子に、こんな力が……

えっ、あの子に、そんな力が……

驚く人であることにおいて、教育者は詩人と同じだ。

驚く心が失せた時、詩も教育も、形だけが美しい殻になる。

(育ての心、倉橋選集、第三卷)

倉橋惣三は、しばしば、自由保育論者であるといわれる。たしかに、彼は、子どもの自由な活動を重んじた。しかし、彼自身は、自由保育といおうと何といおうと、真の保育をを求めるのだというであろう。ことに、現代解釈されている「自由保育」は、あまりに安易にすぎることが多い。子どもに勝手なことをさせておいて、それを見ているのが「自由」である。しかし、それは大きな間違いであって、子どもの自由な活動の背後には、教師、保育者の細かな準備、心づかい、計画、また、人には見えない配慮があるのである。

子どもの活動は自由であるが、おとなの側には、一点、犯すべからざるものがなければならない。

一点の厳粛味

子供は遊ぶ。われらは子供と共に遊ぶ。しかしおとなの遊びに子供を使ってはならない。

子供は自由だ。われらは子供に自由を与えてやりたい。しかし、子供にいかなる生活をさせるかにはおのずからなる限度がある。みだるべからざる規矩がある。子供は自由だが、子供の相手をするものには、守るべきところがなくてはならぬ。……中略

子供といっしょに笑いながら、ふざけながら、おどけながらも、自分自ら戒め慎みてみだるところのない一点の厳粛味、それのないものには子どもは託せられない。

(幼稚園雑草、倉橋選集、第二卷)

倉橋惣三の保育論の後にある、武士道的ともいえる折目目の正しさを、見逃してはならない。

以上に述べたものは、おとなが子どもに対するとき、柔軟心をもって向わねばならぬことを説いたものであった。理論化し、あるいは論理的に述べるならば、それも可能である。しかし、それを、

倉橋惣三は、直観的洞察をもって示した。そして、それによって、人は理論的に述べることはできなくとも、直観的に体得することができるのである。このような意味で、倉橋惣三の文章は、日本の幼児教育界の与えられた大きな遺産であると思う。倉橋惣三の保育論そのものも、もちろん、現代に生きる新しいものである。しかし、それは、論理的に分解するならば、進歩的な幼児教育論に共通の論旨である。だが、倉橋惣三の幼児に対する直観的洞察を示す文章は、他に類を見ないものである。相手に対する同感、子どもの姿に驚く眼、子どもと互いに通じあう気持ち、このように、おとなが子どもと内面的に交流することができるようになるために、日本的な直観力は大いに役立つものであろう。

日本の幼児教育は、今後、ひろく、世界の幼児教育に貢献することのできる芽ばえをたくさんもっている。その中でも、倉橋惣三の示したような子どもに対する直観的な理解——それは日本語の表現をとるので、国際的に理解されることは容易でないのであるが——は、世界に対して寄与することのできる大きなものであると思う。おとなが、子どもの気持ちをもっと理解するようになったなら、それは、世界平和にも役立つであろう。

つけたし

私が米國留学中のことであった。七月のある日、珍らしく、倉橋

先生より手紙をいただいた。故郷を遠く離れて外国にいるときに、郵便ボックスの中に手紙を見つけることは、実に嬉しいものである。すぐに開くのはもったいないから、いつも、しばらくポケットの中にいれておいて、ゆっくりと読む時間ができたときに封をきって読むのが常であった。その日も、私は、先生の手紙をポケットの中で温めて、それから、スチューデント・ユニオン（学生会館）の談話室のソファにふかぶかと腰をおろしたのである。日本の学生会館と違って、七階建ての、冷暖房完備の、機械文明の象徴であるような、デラックスな鉄筋コンクリートの建物である。そこでおもむろに、先生の手紙を開くと、二つ折りにした手紙の中から、笹の葉が一枚出てきた。そして、このわきに、「おほしさま」と書いてあった。あとは、二、三行、安否をたずねることばが記されているだけの手紙だった。私は、この笹の葉に、実に、日本的なものを感じたのであった。もう、すでに枯れて黄色くなった一枚の葉は、英語をはなす機械文明の国の人には、何の意味もない一枚の枯葉である。床に落したら、誰かが靴の底で踏んでしまつて、それきりのものである。しかし、その一枚の枯葉に、たなばたさまの思い出や、日本の香りをいっばいに感じたのであった。ぎっしりと並べられた文字よりも、もっと多くのものを、先生の送ってくださった一枚の笹の葉に読んだのである。黄色くなった枯葉を示しながら、拙い英語でどんなに説明しても、私の親しくしている人にすら、共感して

もらえそうもない寂しさを感じざるを得なかった。

倉橋先生の文章を外国人にわかってもらおうとするときに、同じもどかしさを感じるのである。これはどうしたらよいのであろうか。

## 五、むすび

——子どもから学ぶ——

倉橋惣三の幼児教育論の紹介を結ぶに当って、どうしても一言しておかなければならないことがある。それは、倉橋惣三の幼児教育論は、ベスタロッチ、フレーベル、デューイー、スタンレー・ホールなど、多くの先駆者に負っているが、もっとも多く負っているのは、子ども自身であることである。それだからこそ、四十年後に読んでも、なお、幼児に接する者の共感をよぶのである。彼自身、次のように述べている。

子どもから学ぶよ

「子どもから学ぶ」ということは、フレーベルが幼児教育者に与えた最大なる格言のひとつである。のみならず、フレーベル自身がその実を体証しているのである、けれどフレーベルの彼の教育的創見は、もとより彼の大いなる天才によることであるには相違ない

が、ひとつには彼がよく子供に学んだ結果であるといえる。……フレーベルの師はシュリングでもなくてベスタロッチでもなくて実に子供であるというべきである。……

フレーベルのみではない。教育上の偉大なる創見は、すべて、子供から学んだもののみである。もしそれが、子供以外のものから出た知識理論であるときには、たいてい失敗であることが多い。すなわち少しく奇に過ぎた言い方をするようではあるが、子供はまず教育者に教えて、それが自分を教育させるのであるといつてよい。

(大正2年、幼稚園雜草、倉橋選集、第二卷)

子どもから学ぶことこそ、幼児教育の理論と実践の進展のための最大の条件であろう。

神の創造物である人間の、もっとも純なものである幼児に、私どもは、教えられるものをたくさんもっているのである。

倉橋惣三の幼児教育論を通して、私どもの教えられた大きなものは、子どもから学ぶことの偉大さを知らされたことであろう。今後、時代の進展とともに、施設の、制度的にも、学問的にも、技術的にも、幼児教育に進展していくであろうが、その際に、私どもに、基本的に「子どもから学ぶ」謙虚さを忘れてはならないのである。